

# 三重県亀山市関町における歴史的町並みの空間利用

磯野 巧\*・植手 友浩\*\*

Spatial Use of Historical Landscape in Seki Town, Kameyama City, Mie Prefecture, Japan

Takumi ISONO and Tomohiro UETE

## Abstract

The purpose of this study is to describe the characteristics of the use of Seki Town's historical landscape (Kameyama City in Mie Prefecture, Japan) through an analysis of the local government and regional organizations' efforts in regional development. There are a lot of historical buildings in the center of Seki Town, and the local government and residential organizations moved on with the historical landscape conservation relatively early. This area was designed as an Important Preservation District for Groups of Traditional Buildings in 1984 because a shadow of post town has remained. After being certified as an Important Preservation District, the local government prepared a variety of educational programs such as citizens' courses for the local residents to learn the regional history and culture. The historical landscape has also been regarded since the 2000s as a tourism resource to promote regional development; the local government has been engaged in establishing tourist facilities such as public museums, or rest stations and landscaping works of some local cultural properties on the Tokai-do. Furthermore, the local residents have worked aggressively to voluntary guide tour activities by utilizing their own wisdom or experiences with the learning contents. In the late 2000s, the local government recognized the historical landscape as a much more important tourism resource for regional development and has tried to associate community events, such as traditional festivals or local education, with tourism. In Seki Town, the historical landscape of the post town plays an 'iconic' role in the regional identity of local people. Thus, it functions as a place for 'local education' and the local government and residents have utilized the space for educational purposes. On the other hand, the historical landscape is also recognized as the meanings of regional development. Today local people use the historical or cultural knowledge accumulated in a living space as well as the appearance of the historical buildings. It can be pointed out that the regional development in Seki Town has made progress caused by the interaction between using the historical landscape for education and tourism, while the more comprehensive regional resources on the historical landscape tend to be regarded as a subject for use in regional development.

キーワード：歴史的町並み、観光、地域活性化、地域学習、関町

## 1. はじめに

歴史的町並み<sup>1)</sup>が地域活性化の一手段として注目されるようになって久しい。織田(1997)によると、日本における歴史的町並みの多くはかつての門前町、城下町、宿場町、港町に残存し、これらの地域では価値ある町並みの「継承」を本質的意義としながら歴史的町並みの保全運動が展開してきた(久, 2001)。こうした町並み保全運動は、近代化にともなう都市の変貌から歴史的環境を維持・継承するといった文脈において、1960年代頃より長野県木曾町や岡山県倉敷市などで

嚆矢的に取り組まれてきた。また、1975年に文化財保護法が改正され、文化財の定義の中に「周囲の環境と一帯をなして歴史的風致を形成している伝統的建造物群で価値が高いもの」が加えられた(太田, 1981)。とりわけ「重要伝統的建造物群保存地区」制度が導入されると、自治体も歴史的町並みの保全に関心を寄せるようになり、結果として歴史的町並み保全運動は全国各地で取り組まれるようになった。

こうした保全運動によって整備・修景された歴史的町並みは、1970年代以降、観光資源としての性格を帯びるようになった。1980年代になると、自治体も町並

\* 三重大学教育学部社会科教育コース講師

\*\* 愛知県岡崎市立大門小学校主事

み保全に関心を寄せるようになり、歴史的町並みを活かしたまちづくり運動が全国各地で取り込まれるようになった(大橋ほか, 2003)。近年では「小江戸」や「小京都」と称される歴史的町並みがメディアによって頻繁に取り上げられており、歴史的町並みが観光地として認知・定着されつつあると言えよう(小堀, 1999; 鈴木, 2007; 丸山ほか, 2008)。

歴史的町並みを題材とした研究は、これまでに十分な蓄積がなされてきた。地理学における既往研究は、歴史的町並みの修景実態や形成に着目した研究(小堀, 1999; 大橋ほか, 2003)、町並み保全運動をめぐる住民意識に関する研究(大島, 2005, 中尾, 2006, 丸山ほか, 2008; 磯野ほか, 2015)、そして本稿で取り上げる町並み保全運動にともなう商業振興や観光地化プロセスについて論じた研究、以上三種に大別される。商業振興に関する研究をみると、溝尾・菅原(2000)は埼玉県川越市において進展した町並み保全運動が、個々の商店に経済効果をもたらしただけでなく、商店街における統一的な景観形成に貢献したことを指摘した。茨城県古河市の事例を検証した兼子ほか(2004)は、中心市街地の衰退と、その解決策としての都市観光の諸相を明らかにした。そのなかで、中心市街地に分布する歴史的資源に対する観光客のニーズと、それに応対する地元住民による観光ボランティアガイド活動の重要性が言及されている。一方、観光地化プロセスについて論じた研究については、福田(1996)や淡野・呉羽(2006)が代表的であろう。福田(1996)は沖縄県竹富島の赤瓦景観を事例として、町並み保全運動を通して観光地化が進展し、その過程において文化景観という新たな伝統が創出されたことを明らかにした。淡野・呉羽(2006)は茨城県桜川市真壁町における町並み保全運動が登録文化財制度の活用を契機に活発化したことを示し、そこから派生的に取り組みされた観光地化の諸活動が地域活性化に繋がったと述べている。

これらの研究蓄積により、町並み保全運動や歴史的町並みを活用した地域活性化の諸相が解明されつつある。しかしながら、淡野・呉羽(2006)も指摘するように、歴史的町並みの観光地化プロセスや地域活性化の実態には地域的な差異が存在する。また、観光地の「個性」が求められるポスト・マスツーリズム時代において、観光による地域活性化の形態はますます多様化・複雑化しつつある。こうした状況下、町並み保全による観光地化プロセスや地域活性化に関する新たな個別事例を検討・蓄積することは、その一般傾向を検討する上で非常に有用であると考えられる。

そこで本稿では、三重県亀山市関町を事例として、歴史的町並みを活かした地域活性化の取り組みを分析することより、歴史的町並みの空間利用にみられる諸

特徴を明らかにすることを目的とする。江戸時代、関町は東海道五十三次の宿駅として、参勤交代や伊勢参りなどの交通の拠点として「関宿」が整備された。関町は2005年1月11日に旧亀山氏と合併し、現在の行政区分では三重県亀山市に含まれている。現在、東海道の宿場町のほとんどは原型を留めていない一方で、関宿には江戸時代の宿場町に特有の建築様式を残す家屋が数多く残されている。江戸時代の面影を今に色濃く残す関宿は、歴史的・文化的価値が高く評価され、1984年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている<sup>2)</sup>。亀山市では、これまでに住民組織による地域活性化の取り組みが積極的に行われており、また、現在では宿場町や城下町を中心とした歴史文化を活かした地域活性化を行政が推進している。それ故、歴史的町並みの空間利用をめぐる個別事例を検証する上で、亀山市関町を好例地域として選定した。

本稿の構成は以下の通りである。まず関宿における歴史的町並みの形成過程を詳述する。次に中心市街地としての関町の変遷に着目しつつ、関町における歴史的町並み保全運動の展開について示す。その上で、歴史的町並みを活かした地域活性化の取り組みを分析し、関町における歴史的町並みの空間利用にみられる諸特徴を検討する。なお、本稿に関わる現地調査は2016年4月から7月にかけて行った。

## 2. 関町における歴史的町並みの形成過程

鈴鹿山脈の東麓に位置する関町は、古くから交通の要衝として繁栄していた(図1)。関町一帯はもともと伊勢守平維衡を祖とする伊勢平氏の基盤であり、中世には伊勢平氏の流れを汲む関氏の所領となった。これによって地蔵院の一郭が門前町の様相を呈するようになり、地蔵院を軸として次第に宿場町が整備されていった。1601(慶長6)年には江戸幕府の宿駅制度の整備によって、東海道五十三次の宿駅となり、伊勢別海道(東の追分)、大和街道(西の追分)の分岐点という立地条件から参勤交代や伊勢参りなどの交通拠点として繁栄することとなった<sup>3)</sup>。

現在の町並みの基本構造は、天正年間(1573~1592年)に関盛信が道路を改修して、新所と木崎の間に位置する中町に町建てを行ったことでその基盤が構築されたと言われている。中町は宿場の中核の機能を有しており、問屋、本陣、脇本陣といった主要施設が配置されていた。現存する町屋もその面影を残しており、二階壁面を塗籠めて虫籠窓をあけたものが多い(図2)。一方、木崎には平屋建てや或いは厨子二階建てで二階壁面を真壁とするものが目立つ。新所には格子や庇の幕板など伝統的手法をもつ家屋が残存している。1825

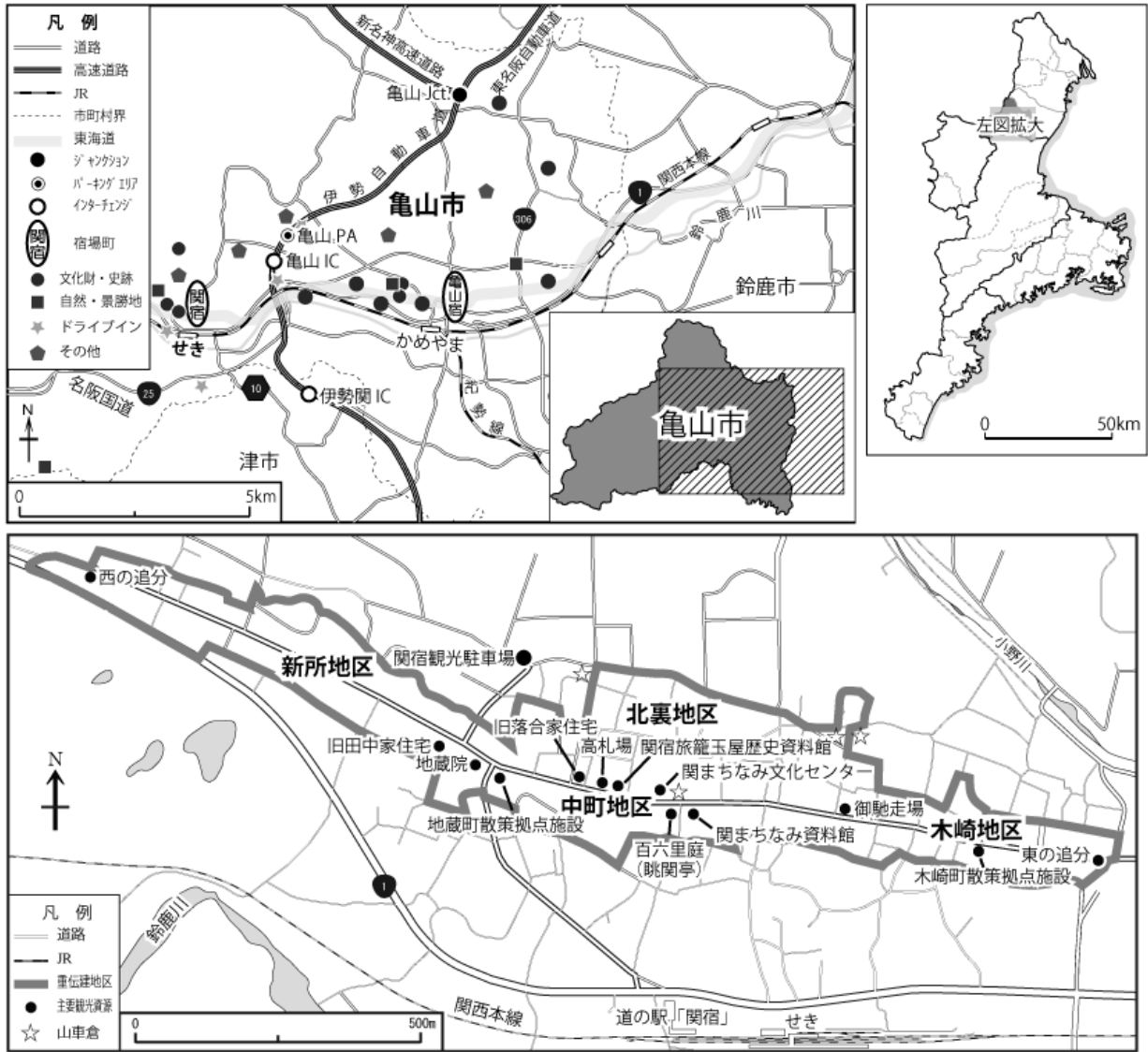


図1 研究対象地域



図2 関宿旅籠玉屋歴史資料館 (2016年)  
(2016年6月 磯野撮影)

(文政8)年の中町で発生した火災により家屋45軒が焼失したものの、以降は大きな災害なく今日に至っている(文化庁文化財部参事官(建造物担当), 2010)。

関町の歴史的町並みは、鈴鹿川左岸の比高15mほどの段丘面に形成されており、高燥平坦で要衝としても優れた立地となっている。歴史的町並みは東海道に沿って1.8km続いており、関町中心部の東西それぞれの追分まで古い家屋が連続している。関町の歴史的町並みは宿場町の町屋を骨格としており、基本形や規模は江戸時代からほとんど変化していないとされている(伊藤, 1984)。

### 3. 歴史的町並み保全運動の展開

#### 3.1 関町中心部の変遷

宿駅制度が廃止された明治期以降においても、関町

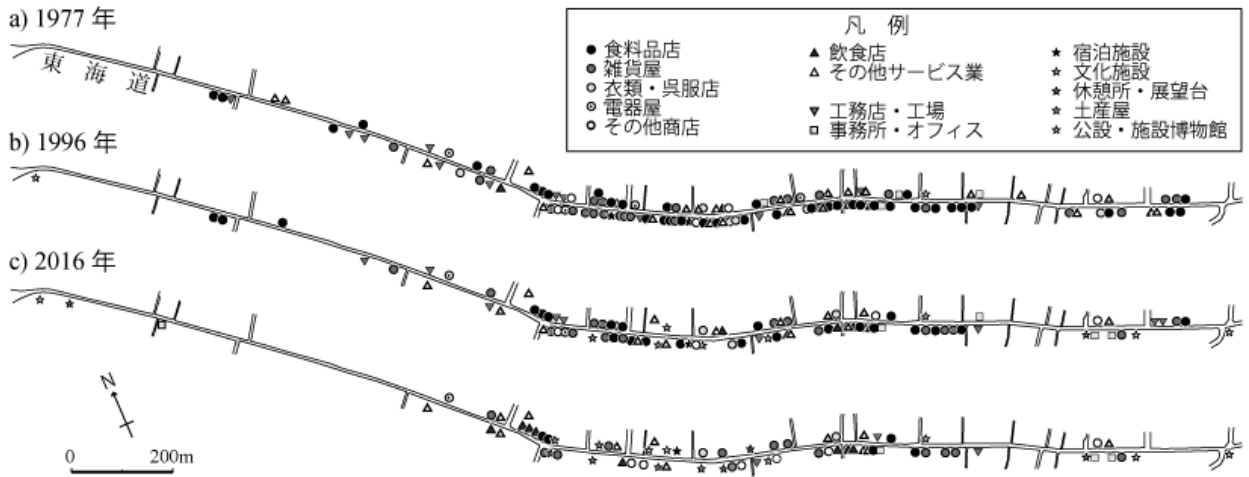


図3 関町中心部における土地利用形態（1977年、1996年、2016年）

（ゼンリン住宅地図（1977年、1996年）および現地調査（2016年）により作成）

は伊勢参りの往来により賑わいをみせていた。しかしながら、1890（明治23）年に四日市と草津を結ぶ関西鉄道<sup>4)</sup>が開通したことで、関町は宿場町としての機能を喪失し、東海道の通行者数も減少の一途を辿っていた。1952年に国道1号線が開通したが、関町においては東海道以南を通ったことが幸いして、中心部の往時の景観が損なわれることはなかった（文化庁文化財部参事官（建造物担当）、2010）。

以降、関町中心部は小規模な商店街として、周辺部は住宅地としての性格を帯びるようになった（松村ほか、2007）。しかしながら、モータリゼーションの進展に伴うロードサイド型の大型商業施設の台頭によって、関町における商業環境は大きく変容した。中心部における商業施設の分布をみると、1977年には多種多様な業種が立地していたが、1997年になると食料品店を中心にその数が大きく減少している（図3）。2016年においては食料品店や雑貨屋などが部分的に立ち並ぶ程度となっており、中心商店街としての機能は縮小傾向にある。一方で、飲食店の立地数は増加しており、観光客の来訪を意図する店舗も多数確認することができる（図4）。ほかにも、土産店や休憩所・展望台といった様々な観光施設が新設されている。このように、関町中心部は観光目的地としての性格が色濃くなりつつある。次節では、関町中心部の観光資源である歴史的町並みについて、その保全運動の変遷を説明する。

### 3.2 歴史的町並み保全運動の展開

関町において歴史的町並みの保存運動が展開したのは、1970年代後半のことである。文化財保護法改正に伴う全国的な歴史的町並み保全運動高揚期において、関町においても歴史的町並み保全に対する関心が高まっていた。1980年2月に関町の住民約170名を会員と



図4 観光客向けの飲食店と英語表記による説明（2016年）

（2016年5月 磯野撮影）

する「関町町並み保存会」が結成されると、同年6月に行政が関町伝統的建造物群保存条例を施行した。また、同年11月に関町伝統的建造物保存地区補助金交付要領<sup>5)</sup>を定めて、町費による修理修景事業が開始された。保存修理修景事業は、宿場時代から残る「伝統的建造物」を修復する修理事業と、それ以外の「非伝統的建造物」を対象として、周囲の伝統的建造物と調和した外観にするための修景事業とに大別され、それぞれの事業を実施する個人や団体に対して、かかった費用の一部を補助する方法で進めている<sup>6)</sup>(図5)。この補助金制度によって2軒の商家が修景された。



図5 修景前後の伝統的建造物

(上：亀山市市民文化部提供資料を転載，下：磯野撮影)

1981年9月、関町伝統的建造物群保存地区保存条例第三条の規定により、保存地区の保存計画が定められ、町教育委員会により告示された。同年11月、三重県都市計画地方審議会において関宿伝統的建造物群保存地区としての承認を得た。この頃になると、住民間にも歴史的町並み保全運動が浸透するようになり、関町町並み保存会の会員も216名に達した(関町教育委員会編, 1984)。また、商工会や観光協会も歴史的町並み保全運動に協力的であり、関駅付近や地蔵院境内に歓迎

塔を設置して観光客を受け入れる体制を整えていた。そして、1984年12月10日、関町関宿伝統的建造物群保存地区(以下、関宿伝統的建造物群保存地区)として都市計画決定された保存地区全域が、文化財保護法第144条に基づき重要伝統的建造物群保存地区<sup>7)</sup>に選定された(関町教育委員会編, 1984)。

関宿伝統的建造物群保存地区は東西約1.8km、面積約25haと、東海道五十三次の宿場町として栄えた関宿全域が範囲である。保存地区は中町、木崎、新所、北裏の4地区である。保存地区には約600軒の建造物が立地しており、東海道に面する200軒と寺院本堂寺が伝統的建造物となっている。関宿伝統的建造物群保存地区の保存事業は、伝統的建造物などの修理・修景、環境物件の復旧に要する経費の補助、保存地区の保存のため必要な管理施設、設備並びに環境の整備、各地区の特性に合わせた整備となっている。これら保存事業は1980年においては関町独自で実施してきたが、国の選定を受けた1984年以降は国・三重県の支援も受けて実施している。2012年度末の段階で、修理修景事業の件数は延べ600件を超した。東海道に面する建造物を対象とした修理修景事業は418件(うち修理事業322件、修景事業96件)であり、事業完了率は50%以上となっている。なお、修理修景事業のうち、大規模な修理修景事業の場合は国庫・県費補助金が活用され、小規模であれば亀山市独自の事業として実施される(亀山市市民文化部文化振興局まちなみ文化室編, 2015)。

重要伝統的建造物群に選定された1984年以降、関町では様々な景観整備事業に着手している。最初に取り組まれたのは無電柱化である。中町地区は1988年、木崎・新所地区は1999年から2000年にかけて遂行された。そして1992年には東海道1.8kmの地道風舗装が行われ、以降、歴史的町並みと調和した街路灯の設置や側溝の石蓋化なども実施された(図6)。2004年に開催された関宿重伝建20周年記念事業では、修景された伝統的建造物への銅板プレート<sup>8)</sup>の設置(図7)、高札場の復元などが図られた(図8)。

修景修復事業や景観整備事業が進展するなかで、観光の拠点も設けられるようになった。1985年には、関宿伝統的建造物群保存地区内4か所(東の追分、御馳走場、地蔵院、西の追分)に案内板が設置された(図9)。1988年には関宿を代表する町屋の旧別所家が関町並み資料館として、1997年に町指定文化財の旅籠玉屋が関宿旅籠玉屋資料館として開館した。1998年には重要文化財である地蔵院の本堂と鐘樓の保存修理が完了し、歴史的町並みを眺望できる百六里庭が完成した。2001年から2003年にかけては、関宿伝統的建造物群保存地区内3か所(西の追分、地蔵町、木崎町)に散

策拠点施設いっふく亭が設置された（図 10）。西の追分と木崎町は空き家となった伝統的建造物の公有化、地蔵町は空き地を公有化した上で散策拠点施設として整備しており、その維持管理はいずれも亀山市が行っている（亀山市市民文化部文化振興局まちなみ文化室編，2014）。



図 6 無電柱化された街道の様子（2016年）  
（2016年5月 磯野撮影）



図 7 伝統的建造物の銅板（2016年）  
（2016年6月 磯野撮影）



図 8 復元された高札場（2016年）  
（2016年6月 磯野撮影）



図 9 東の追分の案内板（2016年）  
（2016年6月 磯野撮影）



図 10 地蔵町の散策拠点施設（2016年）  
（2016年6月 磯野撮影）

#### 4. 住民による歴史的町並みの利活用

宿場情緒を体験することのできる関町の歴史的町並みは、亀山市の重要な観光資源のひとつとなっており、月平均約 6,000 名が関宿重要伝統的建造物群保存地区を訪れている。関町は名阪国道や伊勢関および亀山イ

ンターチェンジに近接するため、北勢や中勢といった三重県内、中部や近畿など近隣からの観光客が目立つ。

また、亀山市は歴史的町並みの特性を活かした地域活性化にも取り組んできた。こうした活動は、とくに重要伝統的建造物群保存地区に選定された1984年以降活発化している。たとえば、1985年には新所地区の伝統的建造物一軒を予約により公開する資料館として開放し、観光客が宿場町当時の生活様式を学習できる場が設けられた。関まちなみ資料館は関町初となる常時公開の資料館であり、建物内には関町の歴史や生活用品、修景修復事業による景観の移り変わりを示した写真などが多数展示されている。関宿旅籠玉屋歴史資料館は日本初の旅籠資料館であり、玉屋で使用されていた道具類や庶民の旅に関する歴史資料を見ることができる。両館の入館者数は2002年時点で14万を越えており、関宿の主要観光資源として定着しつつある<sup>8)</sup>。また、関宿旅籠玉屋歴史資料館は開館当初から町民への無料開放を実施しており、これまでに小学校の社会科学見学、夏季休暇における宿泊体験学習会の開催といった地元の子どもの学習の場として活用されてきた。

現在、歴史的町並みを活かした地域活性化は主として住民が担い手となっている。2005年の合併に際して策定された新市まちづくり計画によると、関宿とその周辺地区は「にぎわいゾーン」として位置づけられており、そのなかで地元住民を軸とした賑わいの創出を実現することが強調されている(朴, 2016)。関町では住民組織による様々な活動が展開しており、これらの組織的な取り組みは歴史的町並みを活かした地域活性化を図る上で大きな役割を果たしていると思われる。そこで本章では、住民組織による諸活動の実態を把握するために、NPO 東海道関宿、関宿案内ボランティアの会、関宿「関の山車」保存会の3組織とその取り組み内容について詳述する。

#### 4.1 NPO 東海道関宿

この組織は関町町並み保存会が改組・改称した関宿の保存会組織である。伝統的建造物に居住する世帯主を構成員としており、関町が重要伝統的建造物群保存地区に選定された時期の会員数は200以上であった。2016年の会員数は50名である。これまでに関宿旅籠玉屋歴史資料館にて学習会を開催したり、会報「町並み瓦版」を隔月刊行したり、視察研修旅行や東海道五十三次シンポジウムを介した他地域との交流や情報交換に取り組んだり、歴史的町並みの保存や保存事業の普及・啓発活動に関わる様々な活動を行ってきた。

また、NPO 東海道関宿では、歴史的町並みを活かした取り組みとして、関宿かるたを作成・活用している<sup>9)</sup>。関宿かるたは「ゲーム感覚で楽しみながら関宿を学習

してもらおう」ことを目的として、NPO 東海道関宿の会員が考案したものである。かるたは関宿の歴史的町並みや自然、四季などを五七五で詠った読み札と、タッチ絵の取り札47組があり、亀山市の市民共同事業のひとつとして2010年に製作された。亀山市のデザイナーが設計を手掛けており、木板を使用した関宿かるた板は当該地区の随所に掲げられた(図11)。その分布状況を見ると、街道沿いを中心としつつも広範囲に分散しており、面的に歴史的町並みを散策・学習することが可能となっている(図12)。



図11 関宿かるた板(2016年)

(2016年6月 磯野撮影)

関宿かるたは三重県の小学校社会科の副読本でも紹介されており、2011年以降は津市や四日市市の小学生が社会科学見学で関町を訪問するようになった(図13)。また、現在では関宿重要伝統的建造物群保存地区内でも市販されており、観光客も関宿かるたを購入することができる。

ほかにも、NPO 東海道関宿では当該地域における賑わい創出を目的に、当該地域内にて市民グループの発表の場を積極的に設けている。たとえば、2018年3月には市民グループによる「関宿まちなみ音楽会」をNPO 東海道関宿主催で開催しており、旧落合家住宅を会場に大正琴や合唱、ウクレレ、津軽三味線などが演奏された<sup>10)</sup>。

#### 4.2 関宿案内ボランティア会

関宿重要伝統的建造物群保存地区では、1989年より地元住民の有志による「関町町並みボランティアガイド」が発足した。活動開始当初は観光客数も今ほど多くなく、4名のガイドで案内活動にあたることができていた<sup>11)</sup>。しかし、関宿旅籠玉屋歴史資料館の開館、地藏院本堂の修理完了、2001年の東海道400周年祭などによって、当該地区を訪問する観光客数が年間10万を超

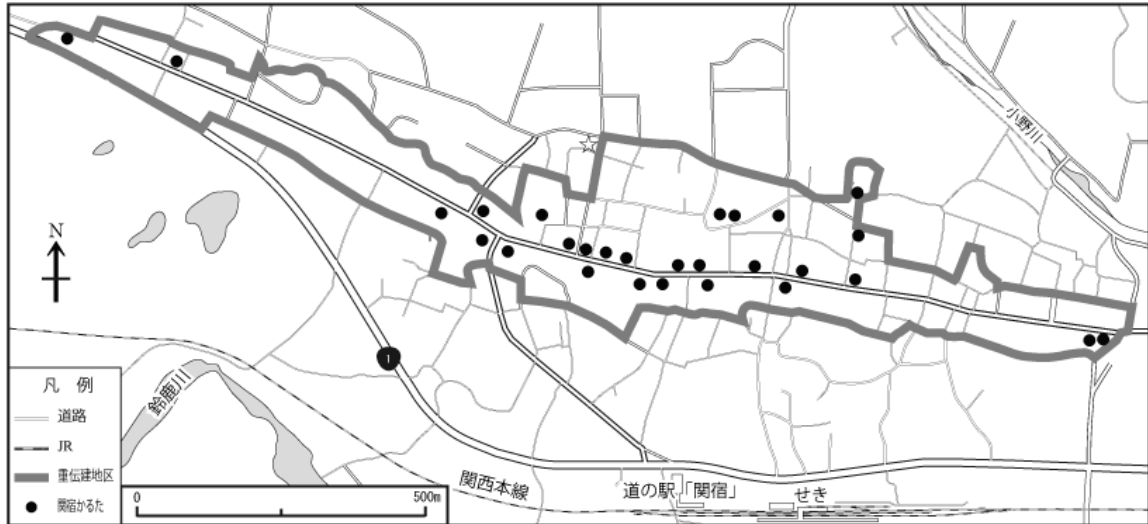


図 12 関宿かるた板の分布 (2016 年)

(現地調査により作成)



図 13 関宿観光駐車場に到着した生徒 (2016 年)

(2016 年 6 月 磯野撮影)

すようになった。これによって従来のガイド方式では対応できなくなり、関町教育委員会は 1999 年に関宿案内ボランティア養成講座を開催した。その講座修了生と案内ボランティアガイドが合流し、2000 年に関宿案内ボランティアの会が立ち上がった。2016 年のガイド数は約 30 名であるが、実質的に活動しているのは 10 名程度である<sup>12)</sup>。2015 年までに延べ 5,255 団体、199,003 名の案内実績がある<sup>13)</sup>。

ガイドの申し込みや連絡先は関宿旅籠玉屋歴史資料館に設置されている関宿案内ボランティアの会の事務局であり、申込用紙を郵送ないしファックスで送付することになっている。ガイド料は無料であるが、原則的に 10 名以上の団体を対象としている。案内時間は 1 時間から 2 時間であり、コースは依頼内容により多少の変動はあるものの、おおむね図 14 のようなルートとなる。その際、関宿をより深く理解してもらうために、

関宿旅籠玉屋歴史資料館と関まちなみ資料館への入館を必ず行程に組み込むと言った工夫を凝らしている(図 15)。また、案内活動では史跡の紹介だけでなく、歴史的町並みの保全過程やその仕組みといった「生活の場」であることを強調することを心掛けている。ほか、2004 年には関中学校の職場体験学習において、生徒が関宿案内ボランティア会の活動に参加する機会が設けられた。

関宿案内ボランティア会では、発足当初から毎月数回の研修会を実施している。たとえば、2001 年 9 月には町並み保全の先進地である岐阜県岩村町を訪問し、女性グループや商店街組織などの活動を学習している<sup>14)</sup>。そこでは、案内活動を行ったガイドの現場での体験について話し合い、情報共有や改善に向けた意見交換を行っている。また、会員が相互に案内役と案内人を担当し、ガイドスキルの向上を図る取り組みもなされている。ほか、歴史的町並みが残っている、もしくは重要伝統的建造物群保存地区に選定されている地域へ研修旅行にて訪問している。

#### 4.3 関宿「関の山車」保存会

この組織は関宿の伝統文化である夏祭りで使用する山車の保存継承を目的に、山車を所有する 4 自治体(木崎、北裏、中町三番町、中町四番町)が連合して、2004 年に発足した。関の山車は 300 年以上の歴史をもつ亀山市指定文化財であり、最盛期には 16 基もの山車が曳き出されていた。しかしながら、宿場機能の喪失や近年における担い手不足から山車の維持が困難になっており、現在は木崎、北裏、中町三番町、中町四番町の 4 自治体のみに山車が保存されている。



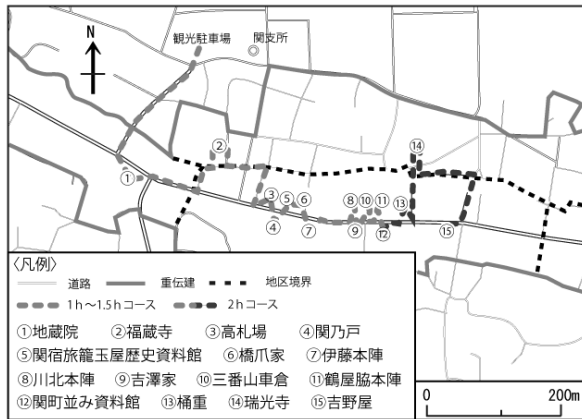


図 14 主要な案内ルート (2016 年)

(聞き取り調査により作成)



図 15 関宿旅籠玉屋歴史資料館における案内活動の様子 (2016 年)

(2016 年 6 月 磯野撮影)

関宿の夏祭りが開催される 7 月下旬は関町が最も賑わう日のひとつであり、関宿の歴史的町並みは夏祭りを盛り上げる重要な舞台と言われている<sup>15)</sup>。関宿が重要伝統的建造物群保存地区に選定されるまでは、街路上の電線が山車の運行上の支障になるとの判断から、山車最上層の「天蓋」が取り除かれていた。こうした状況下、景観整備事業が進展して無電柱化が図られるにつれて、山車の天蓋復元の動きがみられるようになり、2003 年に中町三番町、2011 年に中町四番町にて山車復元事業が実施された (図 16)。

関宿の夏祭りについては、NPO 東海道関宿や関宿案内ボランティア会も関わりを持っている。NPO 東海道関宿では、地元の子どもが曳いた「小山車」の復活や、町屋の軒を彩る提灯の斡旋に取り組んでいる。関宿案内ボランティア会は夏祭り当日に関宿を訪れた観光客に夏祭りを紹介する特別案内を実施している。そして、2004 年に関宿「関の山車」保存会が設立すると、山車の保存だけでなく、祭囃子の保存伝承にも積極的に取

り組むようになった。亀山市とりわけ関町域の各学校と連携しつつ、後継者の育成などにも関与するようになった。関宿「関の山車」保存会では、地元の子どもたちに対する祭囃子の指導を通じて、伝統ある山車と祭囃子の作法を継承していきたいと述べている<sup>16)</sup>。



図 16 関宿の夏祭りの様子 (2016 年)

(2016 年 7 月 三重大学学生撮影)

## 5. おわりに

本稿では三重県亀山市関町を事例として、歴史的町並みを活かした地域活性化の取り組みを分析し、歴史的町並みの空間利用にみられる諸特徴について検討した。その結果は次のようにまとめられる。

関町の歴史的町並みが有する観光資源としての価値は早期から見出されていた。鉄道開通やモータリゼーションの到来によって中心性を失った関町は、近代化に伴う都市の変貌をあまり経験しなかった。そのため、関町固有の歴史的価値や地域性が大きく矮小化することはなく、それが歴史的町並みの維持に貢献したと思われる。そして、関宿の歴史的町並みは東海道五十三次のなかでもとりわけ宿場情緒を残す空間として重要伝統的建造物群保存地区の指定を受け、歴史的建造物の修理修景事業や景観整備事業が加速的に進展した。その結果、関町の歴史的町並みは観光資源としての性格を強めることとなった。

このように修理修景事業や景観整備事業によって維持管理された歴史的町並みは、単なる観光の場としてだけでなく、小中学校の地域学習の場としてのまなざしを受けるようになった。関町は宿場情緒を現代に伝えることのできる、いわば文化的フィールドミュージアムの機能を有しており、「関町ならではの」経験を提供できることが強みとなっている。一方で、地元の小中学生による歴史的町並みの教育利用はとくに積極的であった。具体的には、関宿かるたの導入や職場体験を通して、関町の歴史文化を「楽しみながら」学習す

ることができるようになった。すなわち関町というローカルなスケールにおいて、教育要素に富む対内的なツーリズム空間が創出されたと言えよう。

本稿では重要伝統的建造物群保存地区に選定された関町を対象として、歴史的町並みがどのように利用されているのかを検討してきた。関町は三重県内唯一の重要伝統的建造物群保存地区であり、それは観光資源としての希少性を高めていると看取できる。また、資料館や観光ボランティアガイド、関宿かるたといった「地域を学習する素材とツール」はかなり充実していると判断できる。故に歴史的町並みのさらなる利活用を考えると、やはり学習要素に富む教育ツーリズムの推進が有用であると思われる。歴史的町並みに関する既往研究では、地域資源や価値の再発見といった住民意識に関わる知見は十分に提供されているが、教育ツーリズムといった新しい観光の視座に立った研究は管見の限り見られない。今後は歴史的町並みにおける教育と観光の関係性をより詳細に分析することで、教育ツーリズムという新たな切り口から地域活性化に関わる議論を展開することが可能となるであろう。

## 付記

現地調査に際し、亀山市役所市民文化部まちなみ文化財室、観光振興室の皆様には格別の御配慮を賜りました。また、現地調査では三重大学教育学部学生（当時）の上田 仁氏、大野元義氏、谷口詢弥氏にご協力いただきました。末筆ながら感謝申し上げます。本稿の骨子は、11<sup>th</sup> Japan-Korea-China Joint & 2<sup>nd</sup> Asian Conference on Geography (at New Otani INN Sapporo, Japan) において発表した。

## 注

- 1) 歴史的建造物の集合体については「保存修景集落」や「伝統的町並み」などと多様な呼称が散見されるが、本稿では小堀（1999）や丸山ほか（2008）にならって、町並み保全を取り上げた嚆矢的研究である浅香・山村（1974）による「歴史的町並み」という呼称を便宜的に使用する。
- 2) 2017年10月現在、東海道の宿場町で重要伝統的建造物群保存地区に指定されているのは関宿だけである。
- 3) 1843（天保14）年の東海道宿村大概帳によると、関宿は総長15町13間、家数632戸、人口1,942、本陣2、脇本陣2、旅籠屋42であった。城下町であった亀山宿よりも宿場としては大きく、東海道のなかでも屈指の規模を有していた（伊藤，1984）。
- 4) 現 JR 関西本線。
- 5) 伊藤（1984）によると、補助金は「主屋については、外観保存のための屋根、壁、建具及び土台の修理並びに外観保存に付随する内部の造作で、柱、土台、欄間、天井及び廊

下等の修理に要する経費、当該経費の5分の4以内の額（ただし500万円を限度額とする）」を主体に、門、樹木を含み、新築、増改築に際して外観を伝統的建造物に模したもののにも支出することを規定している。

- 6) 亀山市市民文化部提供資料による。
- 7) 2005年1月11日に旧関町と旧亀山市が市町村合併し、新亀山市となったことを受けて、地区名称が「亀山市関宿伝統的建造物群保存地区」へと変更になった。
- 8) 前掲6)。
- 9) 中日新聞（2014年12月9日発行）を参照。
- 10) 中日新聞（2018年3月10日）を参照。
- 11) みえ歴史街道構想津芸芸久居一志地域推進協議会（2003）を参照。
- 12) 前掲6)。
- 13) 前掲6)。
- 14) 中日新聞（2001年9月13日）を参照。
- 15) 前掲6)。
- 16) 中日新聞（2008年10月25日）を参照。

## 引用文献

- 浅香幸雄・山村順次編（1974）：『観光地理学』大明堂。
- 磯野 巧・安村健亮・渡辺亮佑・梁 鎮武・曲 宇航（2015）：中山道望月宿における歴史的町並みの形成過程。地域研究年報，37，1-31。
- 伊藤達雄（1984）：三重県関町における街並み保存と住民の対応。三重大学環境科学研究紀要，9，1-8。
- 大島規江（2005）：伝統的建造物群保存地区における町並み保存に対する住民意識—長野県楡川村奈良井を事例として—。日本建築学会計画系論文集，590，81-85。
- 太田博太郎（1981）：歴史的町並みの総点検。環境文化，50，1-3。
- 大橋智美・和泉貴士・小田宏信・斎藤 功（2003）：製糸都市須坂における歴史的景観の保全。地域調査報告，25，47-70。
- 織田雪江（1997）：「中山道の宿場町」を景観整備に生かす。浮田典良編：『地域文化を生きる』大明堂，165-187。
- 兼子 純・新名阿津子・安河内智之・吉田 亮（2004）：古河市における中心市街地の変容と都市観光への取り組み。地域調査報告，26，123-150。
- 亀山市市民文化部文化振興局まちなみ文化財室編（2014）：『関宿重要伝統的建造物群保存地区選定30周年記念誌—概略版—』亀山市役所。
- 亀山市市民文化部文化振興局まちなみ文化財室編（2015）：『関宿重要伝統的建造物群保存地区選定30周年記念誌』亀山市役所。
- 小堀貴亮（1999）：佐原における歴史的町並みの形成と保存の現状。歴史地理学，41(4)，21-34。
- 鈴木富之（2007）：香取市佐原重要伝統的建造物群保存地区来訪者の観光行動の空間特性。総合観光研究，6，35-48。
- 関町教育委員会編（1984）：関町史—下巻—。関町役場。
- 淡野寧彦・呉羽正昭（2006）：茨城県桜川市真壁町における町並み保全活動と地域活性化。茨城地理，7，21-36。
- 中尾千明（2006）：歴史的町並み保存地区における住民意識—

- 福島県下郷町大内宿を事例に－. 歴史地理学, 48(1), 18-34.
- 朴 貞淑 (2016) : 亀山(関宿)の文化・持続可能な福祉のまちづくり. 朴 恵淑編『亀山学』風媒社, 114-137.
- 久 隆浩 (2001) : 歴史的まちなみ保存の現代的意義. 都市研究, 1, 73-78.
- 福田珠己 (1996) : 赤瓦は何を語るか－沖縄県八重島諸島竹富島における町並み保存運動－. 地理学評論, 69A, 727-743.
- 文化庁文化財部参事官(建造物担当) (2010) : 『歴史を活かしたまちづくり－重要伝統的建造物群保存地区 87－』文化庁文化財部参事官.
- 松村有紹・木下 光・丸茂弘幸 (2007) : 生活重視型町並み保存における伝統的家屋の現状変更行為の類型と空間構成の変化に関する研究－三重県亀山市関町「関宿重要伝統的建造物群保存地区」を事例として－. 都市計画論文集, 42(3), 103-108.
- 丸山美沙子・水谷千亜紀・小島大輔・山崎恭子・長坂幸俊・ブランドン＝マナロ＝ヴィスタ・星 政臣・吉田 亮・松井圭介 (2008) : 地域資源としての歴史的建造物の利用とその課題－茨城県筑西市下館地域を事例として－. 地域研究年報, 30, 109-141.
- みえ歴史街道構想津安芸久居一志地域推進協議会 (2003) : みえ・まんなか学のすすめ Vol.4－わが町から歩いてみよう平成13・14年度研修会に伴う資料収集によるボランティアガイド(語り部)事例集. 三重県津地方県民局生活環境部.
- 溝尾良隆・菅原由美子 (2001) : 川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全. 人文地理, 52, 84-99.